慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	漱石文庫のメレディス : その基礎事項に関する覚書
Sub Title	
Author	飛ヶ谷, 美穂子(Higaya, Mihoko)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1987
Jtitle	三田國文 No.8 (1987. 12) ,p.64- 74
JaLC DOI	10.14991/002.19871200-0064
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19871200-0064

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

漱石文庫のメレディス

——その基礎事項に関する覚書——

飛ケ谷美穂子

はじめに

東北大学付属図書館に漱石文庫として保管されている旧漱石山房蔵書に，漱石自身による数多くの書き込みのあることは，よく知られている。その主要なものは，『漱石全集』[1]第十六巻に収められ，研究者に資するところ少なくない。シェークスピアやニーチェへの書き込み等は，資料的価値を越えて，それ自体が研究の対象となりうるほどの内容を持つものである。

ただ，既に指摘されていることだが，『全集』にはかなりの収録もれがある。また，『全集』が収録の対象としなかった下線・傍線や○×などの印も，漱石の「読み」を雄弁に物語っていることがある。

メレディス (George Meredith) の作品の場合，漱石文庫所蔵の18巻のうち16巻に書き込みが見られるが，『全集』に記載のあるのは，その中の10巻のみで，それにも遺漏がある。これに関しては夙に，久野真吉氏の「『漱石文庫』のメレディスを見て」[2]に指摘があるが，惜しむらくは紙幅の関係か一部の報告に限られている。

本稿は，漱石文庫とその他周辺資料を基に，漱石のメレディス受容をめぐって基礎事項の整理を試みるものである。なお，『サンドラ・ベロニ』と『リチャード・フェヴァレルの試練』に関する別稿[3]の補助資料として，この二作への書き込み（『全集』未収録分を含む）の一覧を付す。

1

漱石文庫には今日，18巻のメレディス作品が収められている。すべてロンドン・コンスタブル社 (Archibald Constable & Co.) の発行で，全集として揃えたものではないが，当時の18巻本全集と書目は一致しており，主要作品をほぼ網羅していると云ってよい。漱石はメレディスの書簡集も読んでいたらしいが，[4]蔵書目録には見当らない。

まずこの巻の概要を紹介する。『全集』第十六巻の「漱石山房蔵書目録」（以下，「目録」という）とは分類と順序を多少変え，私に一連番号を付した。なお書誌に関しては，1909-11年刊の全集 (Memorial Edition. 27 vols. Constable & Co.) 第27巻所収 *Chronological List* (Arundell Esdaille ed.) が不完全ではあるが最も詳しい。

◇New Popular Uniform Edition of the Works of George Meredith. 5 vols.

1. Rhoda Fleming. 1897.

2. The Tale of Chloe and Other Stories. 1897.
3-4. Poems. 2 vols. 1898.
5. An Essay on Comedy, and the Use of the Comic Spirit. 1898.

1897-99年に刊行された新普及版全集（以下N版という）全18巻中の5巻である。Crown 8vo（クラウン紙は15×20吋：その八折判），表紙およそ縦19糎×横13糎。赤クロス装で，表紙にはアラベスクの上にメレディスの頭文字GとMを組合わせたデザインが金で刻まれ，同じく金の題字と木の葉が背を飾っている。1.～4.には写真版の口絵がある。なお，「目録」では5.を別項目としているが，1.の巻末広告等にも，"Uniform with the above, without Frontispiece" と口絵のない旨の断わり書き付きで一括して扱っており，この全集の一巻と見てよい。

◇The Works of George Meredith. 12 vols.

6. Vittoria. 1902.
7. The Egoist: a Comedy in Narrative. 1902.
8. The Shaving of Shagpat: an Arabian Entertainment. 1902.
9. Lord Ormont and his Aminta. 1902.
10. One of Our Conquerors. 1902.
11. The Tragic Comedians. 1902.
12. The Amazing Marriage. 1902.
13. Diana of the Crossways. 1902.
14. Sandra Belloni (Emilla in England). 1902.
15. Beauchamp's Career. 1902.
16. Evan Harrington. 1902.
17. The Adventures of Harry Richmond. 1902.

1902-5年にN版の cheaper reprint として刊行されたポケット版全集（以下P版という）全18巻中の12巻。真紅クロス装・天金，菊半截（表紙およそ縦16糎×横11.5糎）の袖珍本である。背に金文字の表題があり，表紙には金枠の中に，メレディスのサインがこれも金でアレンジされている。大久保純一郎氏は，『野分』の素材として漱石自身が八波則吉に示したという「赤い表紙の本」を，この全集の15.と推定している。[5)]

◇Constable's Indian & Colonial Library

18. The Ordeal of Richard Feverel. 1902.

上記のいずれともかなり趣を異にする一巻である。'Indian & Colonial Library'（以下I版という）とは，読んで字のとおりインド及びその他の植民地向けに作られた廉価版で，英本国での発売を禁じる旨の注意書きまでついている。ボール紙装，背は赤クロス装（表紙の文字を一部覆う。あるいは reback されたものか），書名なし。N版と同じ Crown 8vo だが，表紙は縦17.8糎×横12.5糎とやや小さく，白（かったと思われる）厚紙に小舟が描かれ，黒字で表題と作者名が印刷されただけの，ごく簡易な装丁である。この版は前掲書誌リストにも記載がない。

「美本」とは言いがたいが，いかにも手に馴染んだ感のあるこの一巻が，漱石の殊に

愛読した『リチャード・フェヴァレルの試練』であった。

11

つぎに，蔵書の各巻について，ラベル・蔵書印・書き込みの3点を中心に，いますこし詳述しておく。

(a)ラベル

P版のうち，9.～17.の9巻に，見返しに丸善のラベルが貼付されている。

(b)蔵書印

N版のうち，1.と2.には，蔵書印がない。

P版のうち，6.7.8.には，中扉に，正方形の「漱石」印（『全集』第十二巻「印譜」p.832右下）がある。

残る13巻，即ちN版のうち3.4.5.，P版のうち9.～17.の9巻，およびI版の18.には，中扉，または中扉と扉の両方にかけて，正方形の「漾虚碧堂図書」印（同「印譜」p.830上）および仏足跡形「夏目」印（同p.831右上）がある（但し，9.のみ「夏目」印を欠く）。

(c)書き込みの量

16.17.には，書き込みがまったく見られない。久野氏も17.など「頁を繰った形跡がない」としている。

氏は3.4.についても書き込みがないと報告しているが，私の調査ではそれぞれ2ケ所に鉛筆の印が見られた。

1.と18.に書き込みがきわめて多いことも，久野氏の報告どおりである。その他 5.6.9.14.15.にも，かなり多くの書き込みが見られる。

(d)筆記具

漱石は書き込みに様々な筆記具を使用している。主なものは，鉛筆と，漱石の自筆原稿などでも馴染みのセピア色のインクである。鉛筆の書き込みのほうが古い場合が多いが，一概には断言できない。退色のため判別しにくいが，黒インクも一時期用いていたようである。赤インクの書き込みも時折見られる。赤インクは，帝大講師時代，殊に『文學論』草稿に朱を入れた時期に多く用いたと思われる。ちなみに，「朱を入れる」ことを英語では "blue-pencil" というが，比較的初期の書き込みには，青鉛筆を用いたものも見受けられる（メレディス作品にはない）。

メレディス作品の書き込みに使用した筆記具は，下記のとおりである。

(イ)鉛筆……1.～4.，11.

(ロ)インク……12.15.

(ハ)両用……5.6.7.9.10.14.18.

(ニ)3種混用（上記＋黒インク）……8.

(ホ)4種混用（上記3種＋赤インク）…13.

(ハ)のうち，7.は鉛筆が，9.10.はインクが圧倒的に多い。5.14.は，途中で筆記具を変えたらしく，前半は鉛筆，後半はインクで書き込まれている。

13. 18. は複数の筆記具が重複して用いられている箇所があり，漱石が少なくとも二度にわたって読んだことを示している。6. 8. も，筆記具によって書み込みの時期が別であること（即ち読み返していること）が，その内容から推測される。

(e)下線・傍線・印

下線と傍線はともに全般に見られるが，「傍線の方は概して注意が広範囲にわたる部分にほどこされ」ているという久野氏の適切な指摘がある。裏返していえば下線は，注意すべき語句・登場人物の名前・メレディス独特の表現等，細かく具体的な箇所に多く用いられている。つまり，下線の多い場合は研究的に精読し，傍線の多い場合は比較的自由に読みこなしているとみられる。

具体的には，1. 5. 9. は圧倒的に下線が多く，15. 18. は傍線が多い。

線以外にも様々な印が見られる。13. 及び15. には，章題の横に○印を付けたり，ページの縁に赤インクで印を付けたりして，その章全体をマークした箇所もある。

(f)書き込みの内容

書き込みをその内容によって截然と区別することは難しいが，ここでは試みに4つに分類した。それぞれ例を挙げつつ説明しよう。

(イ)研究

難解もしくは特殊な語彙・表現，解釈上の注意箇所などに関するもので，正確な読解とメレディスの特徴の把握を目的にしている。しばしば下線を併用しており，'s' (style), 'ph' (phrase) など留意点を示す略号や，重要語句の抜き書きなどもある。メレディスを読み始めて日の浅いことが窺われる内容である。1. に最も多く，次いで2. に多い。5. 6. にも多少見られ，殆どが鉛筆書きである。

例①：P. 1, 2nd paragraph a new style　(1. 見返し)

②：Keynote of the English comedy　(5. p. 30)

(ロ)分析

上よりはやや大摑みに，作品のモチーフやそこに現れた思想・風俗などに注目したもの。おそらく『文學論』構想に際して，例の 'F'・'f' の分類や，彼我の文学概念の比較研究のための事例として捉えたものであろう。6. 9. 10. に多く見られる。

例①：此 scene ハ日本人ニ興味アリ。比較研究ノ材料ニナル　(9. p. 75)

②：honesty ヲ principle トスル例　(10. p. 262)

(ハ)鑑賞

作品内容や描写についての感想。既にかなりメレディスを読み込み，余裕を以て楽しんでいることを窺わせるものである。12. 14. 15. 18. に多く，主としてインク書きである。9. には6. 7. との比較も見られる。

例①：メレヂスの書中ニハ必ズドコカニコンナ篇ガアル。

情中ニ景ヲ寫シ景中ニ情ヲ描ク頗ル詩趣アリ　(12. p. 35)

②：此辺ノ humour 頗る佳なり　(18. p. 205)

(ニ)批評

読者の立場から更に一歩を進め，明らかに同じ「書く」人間としてメレディスを評価

したもの。小説家・漱石の意見である。14. 15. に見られる。インク書き。

例①：Crisis ハ書キニクキ者ナリ　(14. p. 212)

②：此ノ Renée の変化面白シ。但シ反對の変化も起り得べく。
一様に面白くかく事も出来ルナラン　(15. p. 65)

III

漱石はメレディス作品を一括購入したのではなく，関心の深まるに従って順次買い調えていた。たとえばP版の12冊も，6. ～8. と 9. ～17. とでは入手時期にずれのあることは，ラベルの有無や蔵書印の違いから推定できる。

漱石のメレディス読書を跡づける手がかりとして，更に次のような周辺資料がある。

(a)図書購入メモ

漱石は英国留学前半期に，購入した書籍を代金も含め丹念に一覧にしていた。そのメモは東北大学に保管されており，日記などと照合することにより，購入日が推定できる場合がある。これにより岡三郎氏は，1. 2. を購入した日を明治34年3月5日と考証されている。[6)]

(b)日記

明治34年4月15日　1. に言及。[7)]

(c)断片

(イ)明治38年末～39年初（推定）　13. の梗概。[8)]

(ロ)明治39年末（『文學論』のためのメモ）　10. に言及。[9)]

(d)談話・講演筆記

(イ)『無題』（明38. 11）　10. の挿話を紹介。[10)]

(ロ)『予の愛讀書』（明39. 1）　6. 7. に言及。[11)]

(ハ)『創作家の態度』（明41. 4）　8. に言及。[12)]

(ニ)『メレディスの訃』（明42. 5）　8. 14. 18. 及び15.（推定）に言及。[13)]

(e)作品

(イ)『吾輩は猫である』十一（明39. 4）　14. に言及。[14)]

(ロ)『草枕』四（明39. 9）　8. を引用。[15)]

(ハ)同　九　15. を引用。[16)]

(ニ)『文學論』（明40. 4）第一編第二章　9. を引用。[17)]

(ホ)同上　7. を引用。[18)]

(ヘ)同　第一編第三章　9. 7. を引用。[19)]

(ト)同上　8. に言及。[20)]

(チ)同　第二編第二章　9. を引用。[21)]

(リ)同　第三編第一章　18. を引用。[22)]

(ヌ)同上　10. に言及。[23)]

(ル)『虞美人草』十八（明40. 10）　13.（推定）に言及。[24)]

番号	作品名	版	刊記	ラベル	蔵書印	書き込みの特徴					主な言及箇所（その時期）	書き込み時期（推定）
						量	筆記具	下線	傍線	内容		
1	Rhoda Fleming	N	30	—	—	◎	鉛	◎	○	研究（精細）	購入(34.3カ)／日記(34.4)／ノート	34.3-4
2	The Tale of Chloe	N	31	—	—	△	鉛	○	△	研究	購入(34.3カ)	34-35
6	Vittoria	P	35	—	漱	○	鉛・イ	△	○	研究・分析	ノート(35.6カ)／談話(39.1)	35.6-39
7	The Egoist	P	35	—	漱	△	鉛・イ	×	○	分析	ノート／談話(39.1)／『文学論』(40.5)	35-36
3	Poems I	N	31	—	漾・夏	×	鉛	—	—	印のみ		35-36
4	Poems II	N	31	—	漾・夏	×	鉛	—	—	印のみ		35-36
5	An Essay on Comedy	N	31	—	漾・夏	○	鉛→イ	◎	△	研究		36
9	Lord Ormont & his Aminta	P	35	○	漾	○	鉛・イ	◎	○	分析・鑑賞・6.7.と比較	ノート(36夏カ)／『文学論』(40.5)	36.7-9
10	One of Our Conquerors	P	35	○	漾・夏	△	鉛・イ	○	×	分析	談話(38.11)／断片(39末)／『文学論』(40.5)	36-37
11	The Tragic Comedians	P	35	○	漾・夏	△	鉛	×	○	分析・鑑賞		36-37
12	The Amazing Marriage	P	35	○	漾・夏	△	イ	×	○	鑑賞・批評		37-38
13	Diana of the Crossways	P	35	○	漾・夏	△	鉛・イ・黒・赤	○（鉛）	×	章全体に印（赤・イ・黒）	[『虞美人草』18(40.10)]	38-39
8	The Shaving of Shagpat	P	35	—	漱	△	鉛・イ・黒	×	×	印（黒）・分析	『草枕』(39.9)／『文学論』(40.5)／講演(41.4)	38-39
18	Richard Feverel	I	35	—	漾・夏	◎	鉛・イ	△	◎	分析（鉛）・鑑賞（イ）	『文学論』(40.4)／談話(42.5)	38-39
14	Sandra Belloni	P	35	○	漾・夏	○	鉛→イ	△	○	鑑賞・批評	断片(38末-39カ)／『猫』11(39.4)／談話(42.5)	38末-39.1
15	Beauchamp's Career	P	35	○	漾・夏	○	イ	△	◎	章全体に印・鑑賞・批評	ノート／『草枕』(39.9)／[談話(42.5)]	39

16	Evan Harrington	P	35	○	漾・夏	—	—	—	—	—		読まず
17	Harry Richmond	P	35	○	漾・夏	—	—	—	—	—		読まず

凡例　1．刊記等は便宜上すべて明治年号に統一した。

2．ラベル：「○」あり，「—」なし。

3．蔵書印：「漱」＝「漱石」印，「漾」＝「漾虚碧堂図書」印，「夏」＝「夏目」印，「—」＝印なし。

4．書き込みの量：「◎」極多，「○」多，「△」平均～やや少，「×」極少，「—」なし。

5．筆記具：「鉛」鉛筆，「イ」インク，「黒」黒インク，「赤」赤インク。

6．書き込みの内容は，典型的なものを挙げた。

7．言及箇所：「ノート」＝『文学論ノート』，「購入」＝図書購入メモ。［ ］内は推定。

(f)文学論ノート

村岡勇編『漱石資料—文学論ノート』(岩波書店・昭51) に収められた『文學論』のための膨大な覚書の中に，例として随所にメレディス作品が言及されている。整理して示せば，下記の通りである。

(イ)「矛盾ノ Element」の項	7. を引用 (pp. 126-27)。
(ロ)「Position of Women」の項	9. を引用，6. に言及(p. 171)。
(ハ)「Love」の項	15. に言及 (p. 227)。
(ニ)同上	1. の挿話を引く (p. 230)。
(ホ)「Enjoyment ヲ受ケル理由」の項	6. に言及 (p. 249)。
(ヘ)「Ethics」の項	7. に言及 (p. 264)。
(ト)「Realism & Idealism」の項	7. に言及 (p. 288-89)。
(チ)「Taste, Custom etc.」の項	6. を引用 (pp. 312-15)。
(リ)同上	9. を引用 (pp. 320-22)。

(ヌ)補足：「Moral Feelings」の項「正直 Meredith」(p. 112) とあるのは，前掲日記記事から判断して，1. を指すと思われる。

この内，(チ)はその途中に1902 (明35) 年6月付の記事があり，6. はほぼこの頃に読まれたと推定できる。

また，(ロ)・(リ)は共にそのすぐ前後にタッカーマンやウィンチェスターからの引用があり，9. は漱石がこれらの文献を第一高等学校図書館から帯出していた明治36年夏に読んだとみられる。[25)]

上記の事項を整理し，漱石が主要な書き込みを行った時期を推定して，概ねその順序に配列したのが，68—69頁の表である。

これは，必ずしも入手や初見の時期を意味しない。ラベル・蔵書印の有無や本の形態などから見て，留学当時からメレディスの代表作を一二冊ずつ入手し，帰国後深い興味を抱くに至って，残りの作品をP版全集で丸善から取り寄せたと考えるのが自然であろう。したがって，9.～17. より早い時点で18. に一度は目を通していたと考え得るし，8. を初めて読んだのは同じ蔵書印を持つ6. や7. と近い時期である可能性が大きい。

しかし，既に述べたように，いくつかの作品は明らかに一定の期間を隔てて読み返されている。そして，研究上大きな意味を持つのはむしろ，漱石が書き込みを行いながら集中的に読み，自らの血肉とした過程である。このような観点から，この表では「主要な書き込み」を中心に考えた。6. は古い書き込み，8. や18. は新しい書き込みを基準としたのは，この理由による。細部になお検討の余地はあるが，漱石の「読み」の変化は，この表からも看て取れるのではあるまいか。

おわりに

漱石文庫のメレディス作品は，受容時期とその態度によって，四つに分類できよう。

A．一字一句綿密に研究したもの (主に明治34-35年頃)　　1. 2. 5. 6.

B．『文學論』執筆を念頭に読んだもの（明治36-37年頃）　7. 9. 10. 11. 12.
C．創作家の意識をもって取組んだもの（明治38-39年頃）　8. 13. 14. 15. 18.
D．殆ど読まなかったか，ざっと目を通した程度のもの　3. 4. 16. 17.

漱石が留学中にメレディスを繙いたのは，英文学者として彼が同時代文学に向けた旺盛な好奇心と，当時のメレディスの名声[26]とを考えれば，むしろ当然のことであった。しかし，万人の敬して遠ざけるこの奇矯な作家への彼らしい興味も，そこには動いていたように思われる。そして数年後，自らも作家として歩み出そうとした時，その存在は彼の目に新たな意味をもって映り始めた。執筆に際し，新たに読み返して「人工的インスピレーション[27]」を得ていたと見られるふしさえある。

メレディス受容の深まりは，小説家漱石の誕生と成熟に重なる。その綿密で多様な書き込みに接するとき，明治34年から39年頃にかけての，言いかえれば英国留学から作家としての出発までの，彼の内面の軌跡を見る思いがするのである。

註

1) 岩波書店・昭和40～42年版。以下『全集』と記す。
2) 『英語青年』昭和29年8月，pp. 2-4。
3) 拙稿「『サンドラ・ベロニ』と漱石」（『英語青年』昭和62年2月，pp. 15-16・同62年3月，pp. 22-23）及び「喜劇と悲劇と―『リチャード・フェヴァレルの試練』と『虞美人草』」（『藝文研究』第52号・昭63. 1）参照。
4) 『行人』にメレディスの書簡について言及がある。『全集』第五巻，pp. 467-68参照。
5) 「Meredith を Carlyle にむすぶ漱石」，『英語青年』昭和52年12月，pp. 30-32。
6) 岡三郎「イギリス留学前半の漱石のこころの明暗」，『夏目漱石研究　第一巻』（昭56・国文社）pp. 195-206参照。
7) 『全集』第十三巻，p. 56。
8) 同，pp. 155-56。
9) 同，p. 223。
10) 『全集』第十六巻，p. 487。
11) 同，p. 493。
12) 『全集』第十一巻，p. 157。
13) 『全集』第十六巻，pp. 665-68。
14) 『全集』第一巻，pp. 496-97。
15) 『全集』第二巻，pp. 430-41。
16) 同，pp. 488-91。
17) 『全集』第九巻，p. 84。
18) 同，p. 103。
19) 同，pp. 110-113。
20) 同，p. 126。
21) 同，p. 140。
22) 同，pp. 226-28。
23) 同，p. 234。
24) 『全集』第三巻，p. 389。
25) 文献帯出時期については，岡三郎「東京大学教養学部図書館に発見された漱石の書き入れ本」，『夏目漱石研究　第一巻』（前掲）pp. 347-86参照。
26) メレディスは60才を過ぎる頃から漸く評価され，1892年にはテニスンの後任として英国文人協会会長に選ばれた。1898年には，トマス・ハーディ，ヘンリー・ジェイムズ，レズリー・スティーヴンなど文壇を挙げて，彼の70才の誕生日を祝った。なお，『吾輩は猫である』の出た1905年には，

勲功章 (Order of Merit) を授けられている。
27)『全集』第十六巻，pp. 527-28にある語。

資料　漱石文庫所蔵本　書き込み一覧

※「 」内は書き込みの内容を，[ ] 内は下線部分の本文を示す。

◇『サンドラ・ベロニ』(Sandra Belloni) ◇

1) p. 6, ll. 31-33	傍線
2) p. 9, l. 10付近	「女月下ニハープヲ彈ズ」
3) p. 33, ll. 1-3	「violinist」
4) p. 37, ll. 26-41	傍線，下線 [threw nine large potatoes!]，「Good」
5) p. 62, ll. 1-11	傍線，「英國ノ社會ハ是ナリ」
6) p. 74, l. 6	下線 [An accurate oinometer]，「oinometer」
7) p. 76, l. 23	下線 [the elfin trumpet of silence]
8) p. 173, l. 17-p. 174, l. 8	傍線，「phil」
9) p. 211, ll. 24. -32	傍線，「Wilfrid ノ虚偽」
10) p. 212, ll. 17-31	傍線，「crisis ハ書キニクキ者ナリ」
11) p. 263, ll. 10-24	傍線
12) p. 314, l. 25-p. 315, l. 16	傍線
13) p. 389, 章題横	「Hippogriff and Passion」
14) p. 400, ll. 4-18	傍線
15) p. 428 天余白	「Count Branciani ノ話（挿話）」
16) p. 433, ll. 1-21	傍線
17) p. 448, ll. 3-25	傍線

※ 1)～7)は鉛筆，8)～17)はインク。2)，4)，5)，8)，10)は『全集』第十六巻，p. 93に収録。

◇『リチャード・フエヴァレルの試練』(The Ordeal of Richard Feverel) ◇

1) p. 1, ll. 16-17	傍線（鉛）
2) p. 39, ll. 5-24	傍線（鉛）
3) p. 53 余白	「Richard ト Farmer Blaiz(ママ) B ノ氣風 R ノ Pride」（鉛）
4) p. 61, ll. 3-6	傍線（鉛・イ），「格言」（鉛），「Meredith」（イ）
5) p. 66, ll. 34-37	傍線，「格言」（鉛），「Meredithian」（イ）
6) p. 73, ll. 1-32	傍線（鉛）
7) p. 74, ll. 17-20	傍線，「Meredithian」（イ）
8) p. 96, l. 7-p. 97, l. 15	傍線（鉛・イ），「Nature & Beauty」（イ）
9) p. 98 余白	「Beauty ノ description」（イ）
10) p. 104, ll. 18-36	傍線，「Love」（イ）
11) p. 109, ll. 12-14	「light literature ヲ読ムヲ禁ズ」（イ）

12) p. 115, ll. 14-16	「light literature ノ攻撃」(イ)
13) p. 124, l. 8	「Nature」(イ)
14) p. 125, l. 25	「Love again」(イ)
15) p. 126, ll. 7-8	傍線,「Love」(イ)
16) p. 128, l. 11, l. 28	下線 [the Eighteenth Century] (2ケ所), 傍線 (イ)
17) p. 135, ll. 9-10	「Lover's duet」(イ)
18) p. 149, ll. 28-41	傍線,「格言 Love ニ就テ Cold Blood 及ビ Hot Blood ノ両側面」(イ)
19) p. 159, ll. 29-36	傍線,「格言 Nature」(イ)
20) p. 177, ll. 36-39	傍線, 下線 [THE PILGRIM'S SCRIP] (イ)
21) p. 189, ll. 17-41	傍線 (イ)
22) p. 204, ll. 15-18	「Richard and Ripton デタラメヲ話シテ他ヲゴマカス」(イ)
23) p. 205, l. 3 付近	「此辺ノ humour 頗る佳なり」(イ)
24) p. 223, ll. 10-13	傍線 (鉛)
25) p. 232, l. 7-p. 233, l. 2	傍線,「Just like Meredith」(イ)
26) p. 288, ll. 29-33	傍線 (イ)
27) p. 297, ll. 36-40	傍線 (鉛)
28) p. 312, ll. 26-41	「結婚ニ就キ自己ノ意志 親ニ対スル義務 西洋ノ風」(イ)
29) p. 331, l. 37-p. 332, l. 18	傍線, 下線 [a woman smoking!],「女の煙草」(鉛)
30) p. 373, ll. 1-30	傍線 (鉛)
31) pp. 402-405	傍線,「Clare」(鉛)
p. 402, ll. 11-18, p. 403, ll. 7-23, p. 405, l. 11	「 」印 (イ)
32) p. 418, l. 18-p. 419 全体	傍線 (鉛)
33) p. 424, ll. 34-35	傍線, 下線 [He sat as a part of the ruins] (鉛)
34) p. 425, ll. 8-41	傍線,「Storm」(鉛)
35) p. 438, ll. 17-19	傍線 (鉛)
36) p. 445, ll. 21-28	傍線 (鉛)
37) p. 447 全体	傍線 (鉛)

※ 3), 4), 5), 7), 8), 9), 10), 13), 14), 15), 17), 18), 19), 23), 25), 28), 34)は,『全集』第十六巻, pp. 87-89.に収録。11), 22), 29) は前掲久野論文に報告あり。

※二作とも, 中扉・表題上に「漾虚碧堂図書」印, 扉・表題右肩に「夏目」印あり。

付記：漱石文庫閲覧に際し, 東北大学附属図書館各位には格別の御高配を戴いた。
記して厚く御礼申し上げる。